京鹿子

昭和三十年三月一日発行
通巻一二五九号（毎月一回一日発行）

3月号

—近詠—

鈴鹿呂仁

拾掬集　その六十六

お降りに浄む比叡へ大向こう

牛日の己が一歩を未来(あした)へと

そっと見る夫の横がほ福笑ひ

妻の目の口よりも鋭し歌留多取り

啓蟄の保身にはしる検査室

放心の猫へ春めく窓辺かな

立春の午前零時へ針合はす

如月の風を解けば写楽の目

北野天満宮吟行

早梅に合はす手と手大志持つ

絵馬掛の音の高鳴り寒戻る

冬梅の全き空や絵馬をどる

撫で牛の双眸の光ゲ芽木の空

一輪の早梅へ祈ぐ雨の宮

俳句四季三月号

殯(かりもがり)ひとつ置きます桜貝

PDF= 俳誌の salon

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

和田　照海

這ふ魚

着いてすぐ発つ人日の渡し船

安芸と伊予潮の目碧き人の日よ

人日や遅れ癖つく柱時計

人日や蜑より祝の這ふ魚

人日や言霊のごと紡ぐ薬缶

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

松本　鷹根

去年今年

仄と浮く近江の富士や去年今年

満遍の初日の窓に歳祝ふ

裸木に刻を委ねて陽に戯ふ

初凪の湖に比良映ゆ眺あり

山人の斧研ぐ音や寒に入る

PDF= 俳誌の salon

—近詠—

浮御堂

塩貝　朱千

亡友もねてメタセコイアの冬紅葉

夕星(ゆうづつ)や芭蕉の月の碑に

鳰千羽千の佛に帰依ひとすぢ

浮御堂の炎ゆらぎて鳰ねむらす

老松の幹大蛇(おろち)めく夕月夜

英華採集

また褶を足して返事を澁る父

青梅　金子野生

父と子の切迫した話し合いが想像される。老いては子に従えという言葉はあるものの万事一括りに行かないのが世の習い。旧字の「澁」に父親像は頑固者に映るが、頑固者と決めつけられない父親の姿が垣間見られるのは「また褶を足す」の表現にある。この言葉には父親の心の揺れ動く様が感じられ、気持ちを整理する時間を持ちたいとの葛藤の表れを示している。言葉の省略が句の空間を広げている。

冬夕焼凸凸の街崩れ出す

東京　神田美千留

大都市東京には、昭和の時代のシンボル東京タワーに代わり六三四メートルのスカイツリーが立ち新宿には都庁のツインタワーが高く聳えている。高層ビルの群立する東京は正に凸凸の街である。冬の夕焼に赤く包まれているその街に血の臭いが感じられる。これは、紛れもなくコロナ禍に汚染された感染都市東京が崩れ出したのである。言葉の表現の意外性と季語の斡旋の妙により秀句へと昇華した。

初時雨使ひ古しの落し蓋

高槻　杉井真由美

煮物など和食料理によく使われる「落し蓋」には、食材の味を染みこませたり形の煮崩れを防いだり又は魚の嫌な臭いを逃がしてくれたりする効能があるようである。当然、厨ではよく使われる道具であるので使い古されていることになる。掲句は、夕食の準備として煮物を作っているのだろう。厨の窓から見える今年初めての時雨に温かい物をと思う作者の優しさが見える。意外な取合せに響き合う。

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon

春光　沼田巴字

春光や梢は空と睦み合ふ
荒ぶるにあらず木の芽の怒涛かな
木の芽雨万物開き初めんとす
白椿蜜吸ふ鳥の宙返り
禅寺に人見当らず蝌蚪の空

落ち凧　丸井巴水

笑ふしかなき落ち凧のにぶき音
青天の高きに凧のもがくのみ
極月や明日の約束して死せり
おでん屋のまづは大根友悼む
神木の梟夜ごと呼びつづけ

詩の縁　植村蘇星

いろはにほ生かされ生きて春隣
未完とて愁ふこと無し春隣
詩の縁血となり肉と芽吹きけり
生かされて詩歌の探淵木の芽れ
盤石の裾野広ごる野風の忌

追憶の眼　北川孝子

追憶の濡れし眼に小鳥来る
まだ少し頼られて居りとろろ擂る
再会のまぶし色なき風の中
肉じやがのほつくり煮えて雨月かな
佇めば虫の音に影あるごとし

神麓集

風花　直江裕子

石蕗咲いていまだ独りに慣れずいる
気がつけば枇杷は毎年咲いてゐた
滅びといふことばの響き葱きざむ
風花の好きな誰にも見えない木
言ひつのる女のくちびるピラカンサ

急ぎ足　高木晶子

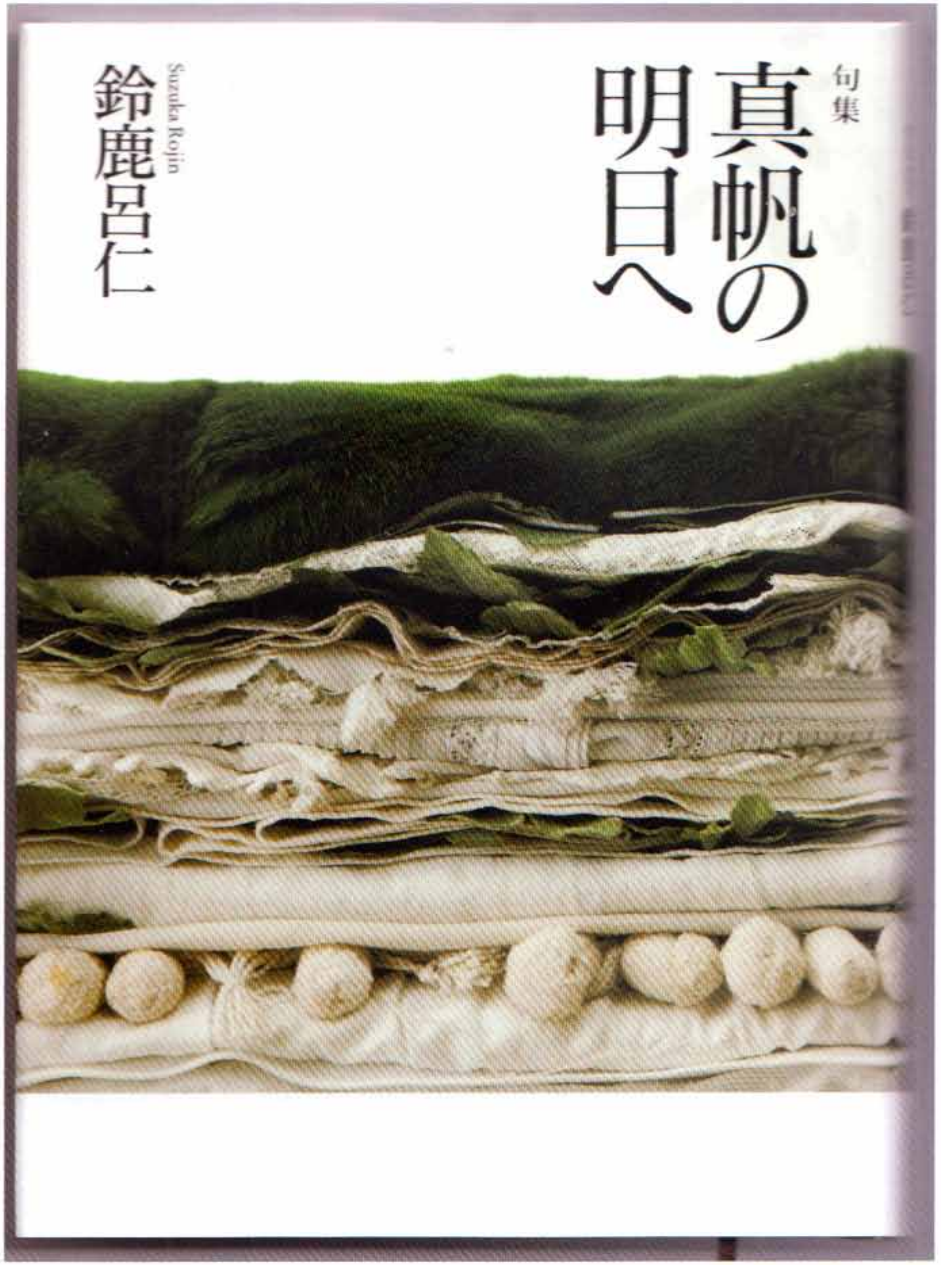
紅葉晴美男と美女の急ぎ足
木枯の列車音過ぐ志士の墓
スケートのエッジの音で林檎噛む
蜜柑食べ自戒後悔繰りかへす
新聞紙新語あふれて芋焼ける

襟巻　伊藤希眸

空といふまた上に妣小春かな
吾が影の小春日に入り丸くなる
夫逝くの筆多くあり師走の灯
宥めつつデイケアに襟巻ぐるぐるに
冬紅葉月日の醸す輪廻かな

節度　奥田筆子

冬さうび開ききらない節度もち
引火性強き語を吐きイブの夜
みそか虹脚から消えて詮索など
枯あぢさゐにくみきれないカメレオン
枯木山の夜会服なりイルミネーション



呂仁句集『真帆の明日へ』

神麓集

婚姻届　井上菜摘子

婚姻届てふてふの押印があり
春雪の中はるの雪見てをりぬ
春の虹架けて蔵へり父還らず
あかときの白梅午後に柩出す
手放せばこころの端を雪解川

春の音　村田あを衣

紙飛行機とばし春への合図かな
花菜風いつも遠くへ置く山河
湖までの半丁ばかりは蝶の道
花絵皿重ねてひとり春愁ふ
ドロップ缶振れば五彩の春の音

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

豊田都峰選

枯野来て禁断の書を繙きぬ
冬林檎剥きて自説は曲げぬまま　京田辺　山中志津子
木枯一号机上いっそう散らばりて
菊の香に包まれ余生の持ち時間　京都　井尻　妙子
野の花のみな透きとほる淡き霧
冬もみぢ路上ライブの楽跳ねる
初しぐれ今朝は甘めの玉子焼
ずず玉や仲良しのゐた川向ひ
いつ見ても河馬は水中冬うらら
不自由を世の常として残る虫

鬼瓦置く路地の奥花柊　城陽　鷺山　珀眉
細釘のとびつく磁石小六月
冬茜パンデミックの水の星
凩やひとり芝居の嗄れ声　福山　亀井　福恵
着ぶくれて先斗町まできてしまふ
余生とは臍かむことも片しぐれ
うぶすなや木の実蹴つたり拾つたり
霧霽れて蒜山三座襞深し
方円の器に満たす水澄めり
西方に浄土ありとよ冬銀河

冬りんご剥くたび過去が遠くなる
数へ日や走るよ走る影重ね　福知山　西村　白杼
大枯野火種のやうに独り佇つ
裸木や裸同志の話し声
風あれば風に応へて散紅葉　高槻　安田　優歌
俳諧の好きな貌して鶫来る
黄落の銀杏は天に諂はず　京都　菊池　和子
ピアニッシモで話す小夜曲冬の蝶
日捲りは日々に加速す十二月
冬林檎紅りんりんと孤高の詩
枯はちす即身仏のごと祈れる
釣瓶落しのこる生命を双肩に　大阪　本郷　公子
秋うらら楽器の歩く少女の背
団栗が小人にかはる空の碧
地球の底にあまたの墓穴落葉踏む
鳥辺野へ言葉惜しみて露の歩々
旅愁かな風にあづける木の葉の嵩
岡崎の文化ゾーンや菊日和
水音に包むつぶやき秋の逝く
霜の夜の扉を閉める音開ける音

風止みて落葉踏みゆく音を踏む　福山　石原　孝人
初しぐれ記憶の底のもらひ風呂
崖氷柱青き夜空に育ちけり
風神の不意に笛吹く枯野かな
銀杏落葉箒にからむ風の声

また褌を足して返事を澁る父
捻りたる反古すぐ戻るそぞろ寒　青梅　金子　野生
栃餅や何時まで残る口減らし
まぎれなく蜜柑島より津軽弁
冬夕焼凸凸(とつとつ)の街崩れ出す
枯れ蔓に名残りのつぼみ朝ひらく　東京　神田美千留
米を詰め大根の白き便くる
自転車のブレーキかけず小春坂
初時雨使ひ古しの落し蓋
グーばかり出す子の明日初時雨　高槻　杉井真由美
ある予感抱へしままに今朝の冬
捨印も死語となりゆく文化の日

PDF= 俳誌の salon
PDF= 俳誌の salon